

会議のあり方について（分科会における議論の活用等）

《質問1》

分科会で議論されている課題等について、本会議で議論し、そのうえで、分科会の方でもその問題認識をさらに掘り下げて議論していただくといった、本会議と分科会を循環させて議論を進めていくことが有効というご意見がございましたが、この件について、皆さまのご意見をお聞かせください。

会議の位置づけ等

➤ 本会議と分科会の関係について

- フィランソロピー本会議と分科会と大会、本質的にはそれぞれ同じベクトルを向いているが、なかなか有機的にこの三つが絡まって成果を上げにくいことが課題。
- 本会議でも、いろいろ分科会のことを議題として取り上げていくことがとても重要。  
分科会の議論においてどういう課題が指摘されているのか、本会議の中でも共有できればいいのではないか。
- 本会議と分科会の循環的な意見交換が現実的である。
- 各分科会での論点を共有し議論を深めていく事は有意義と思う。
- 本会議において、必要に応じて分科会からの報告を受け、取り上げるべき課題はしっかり取り上げる等、適切に対応すべき。
- 分科会で議論されている内容や進捗、課題等について本会議でも情報共有し、場合によっては本会議の意見等を逆に分科会へフィードバックすることにより、連携が強化されるのではないか。その場合、各分科会長には本会議に出席いただき、報告、説明いただく仕組みを構築することが必要。
- 分科会の活動そのものについては、参加メンバーの意欲も高いように感じる。分科会活動を地道に精力的に進めていきながら、そこで生まれた知見やアウトプットを適宜本会議、さらには対外的に発信していくことが当面の使命と感じている。基本的には本会議から独立して分科会活動が進む方が活性化されると思われるため、自律分散方式がベターではないか。
- 全般的に、フィランソロピー会議の動きが少しパラパラしてしまっている印象があり、分科会にも同様の印象があるので、そこをつなぐような仕組みもやっていきたい。

➤ 会議の位置づけ（事業の実施など）について

- 個々の団体が課題にどう取組むかであり、フィランソロピー会議は個々の団体の連携を取り持つ扇の要のような組織。
- フィランソロピー会議として社会的課題にダイレクトに乗り出すと、既存の基礎自治体や団体の取組みとバッティングしてしまう懸念がある。そのため、会議設立当初に5原則を設けた。
- フィランソロピー会議の立ち位置は、社会的課題の解決に直接あたるわけではなく、社会的課題の解決にあたる各団体の連携を図り、共通の利益や課題に対して、いくつかの提言やオプションを出していくこと。そういったフィランソロピー会議の立ち位置を明確にした方がいいのではないか。
- フィランソロピー会議という建てつけの中でもいいと思うが、可能であれば事業をやらせていただきたい。会議が扇の要として、誰かが事業としてつなぎ合わせたり、ファンドレイズや広報などもやっていく。いろいろなプレーヤーをつなぎ合わせ、資金や人材が集まるようにしていくことで、自分たちもやっていこうという人たちが増えていくはず。

|      |                                                                                                                                                                                                                                                          |
|------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 会議運営 | <p>➤ メンバーの追加について</p> <p>○ 今後はオンラインにより会議を実施していくため、会議室等の物理的な制約からの上限はなくなっている。さらなる議論の活性化を図るため、会議メンバーの人数上限を撤廃できないか。</p>                                                                                                                                       |
|      | <p>➤ 分科会の新設について</p> <p>○ 会議メンバー、新規分科会設立等の希望は極力受け入れるよう提案する。</p>                                                                                                                                                                                           |
|      | <p>➤ 会議の開催頻度について</p> <p>○ 少なくとも会議を月 1 回くらいの定例で行い、会議を活発にする必要があるのではないかと。年に 1、2 回では何も進まないのではないかと。</p>                                                                                                                                                       |
| その他  | <p>➤ 情報発信のあり方について</p> <p>○ 分科会の活動（知恵やアイデア）について、何らかの形で国内外に発信することが重要。</p> <p>○ 大小かわらず団体がもっと P R できる機会が必要。そういう場をこの会議で作ってほしい。それによって、会議のめざしている寄付文化の醸成やフィランソロピーの P R に繋がってくるのではないかと。</p>                                                                       |
|      | <p>➤ 情報共有のあり方について</p> <p>○ 団体間でこういった連携ができるのか、それぞれの団体ごとに色々悩みがある中で、聞いて初めてそういう方法あるんだと知ることができる。そういう悩みの部分をうまく知ることができたらと思っている。</p>                                                                                                                             |
|      | <p>➤ 個別議題について</p> <p>○ 第1回会議で使用された世界の潮流に関する資料やデータについて、現在の世界や日本におけるフィランソロピーに関する最新のデータ等を頂けないか。</p> <p>○ それぞれの公益法人や N P O などの団体が、コロナ以前からずっと抱えている、日常の業務を進める上での様々な課題について、どのようなものがあるのかリサーチしてはどうか。</p> <p>○ 連携推進法人制度（地域医療、社会福祉、大学）に関する説明を行政の所管部局からしてもらえないか。</p> |

## 《質問 2》

分科会等で議論している課題等について、本会議で議論を深めていくとした場合、どのようなテーマについて議論したいとお考えでしょうか。

(例) 活動資金、人材育成・確保、ITの活用 など

➤ 本会議で議論すべきテーマについて

- 分科会で会議で議論してほしいことの提案を受けて、会議で議論すべきことではないか。
- 関西を元気にする社会企業家の育成など。特に、社会企業家意識のある若者層の発掘と育成という問題は、産官学どのセクターでも議論すべきテーマではないか。
- いずれの分科会の課題も大切な問題だが、中でも「活動資金」と「人材の確保」の問題は欠かせないのではないか。
- 大阪府内で活動する非営利団体が集うこの会議で、ボランティア活動に参加意欲を抑制させない方策、参加したい人が参加しやすくなる方策を検討してはどうか。
- 各団体の共通課題は、活動資金の捻出方法と将来も含めた人材の育成・確保ではないか。この2つのテーマについて、好事例を見つけ出し、うまくいっている理由について分析し、それをもとに議論していくことで参考になるのではないか。

## 提言内容を踏まえた具体的な方策について

※フィランソロピー大会（12/22）開催前時点でのご意見

### 《質問3》

報告書における提言1及び提言2の実現をめざして本会議として取組んでいくにあたり、メンバー間での認識共有が必要と考えております。

つきましては、

- ・実現に向けたスケジュール感
- ・結集を呼び掛ける具体的な範囲
- ・結集を呼び掛けるアピールポイント
- ・結成後の役割（当会議や既存の全国組織とのすみ分け）

等について、ご意見がございましたらお寄せください。

○2022年4月発足。

○大阪の公益団体の連携、共通課題の抽出、情報交換、解決への提案、オンラインセミナー、シンポジウム連続開催、情報発信、中央行政との対話など。

○フィランソロピー会議が生み出した次なるステップとして、今回のウェビナーである程度形が見えてくればよい。

これからはオンラインが中心になってくるので、新しいプラットフォームもオンライン上に置き、実際に各団体がそれぞれ持つ情報を交換したり、課題を抽出して、解決策を探ったり、場合によっては政府との交渉をオンライン上で行う。今回のウェビナーがそういったような成果を生み出すようなものになればよい。

○スケジュールを検討する前提として、重要事項の方向性の議論を進めることが必要ではないか。とりわけ新設団体の事務局をどうするかが見えてこない、スケジュールを検討するのは難しいのではないか。

○第2段階が実現するまで当会議は必要。当会議と新設の団体は密接不可分の関係になるので新設団体の代表も当会議への参加が必要。

○既存全国組織との関係については、当初は個別組織とし継続的に検討を行う。

○今後、会議の場での議論が必要だと思っている（人的、資金的な面で、現実的に推進的な体制が作ることができるのかなど）。

○財務3基準の見直しに関する要望や、公益団体・財団の運営を縛っている一般法人法のガバナンスに関する改正の議論など、議論によって成果の得られる目標を持たねばならないのではないか。

○現行制度の問題点・改善を求めたい点について意見交換し、共通の課題について、大阪府公益認定等委員会のメンバー（事務局を含む）や大阪府・市の議員との意見交換を経て、府・市議会での改正要望決議、地元選出国會議員との意見交換などを経て、制度の改善を目指すべきではないか。

○公益団体・財団の連絡会議に、どれだけの団体・財団が参加するかが、今後の展開を左右する試金石となる。特に旧団体・財団から移行認定を受けた団体は、主務官庁の監督に慣れていて、上記の改善にどれだけの意欲があるか不明である。

○非営利法人の結集については、極めて多様性が高く、すぐに着手しにくいのではないか。まずは上記の公益団体・財団の連絡会議の成立の可否を見極めてからの議論ではないか。